◉ 宇治魅力発信プラットフォーム会議～子育て編～

「住みやすい宇治」「暮らしたくなる宇治」について意見交換を行いました

7月5日（水）、「宇治魅力発信プラットフォーム会議～子育て編～」を、京都文教大学・京都文教短期大学子育て支援室「ぶんきょうにこにこルーム」にて行いました。
宇治市では、宇治に住む、あるいは訪れる人々に、（1）宇治の魅力を発見し、（2）それを誰かに伝え、（3）さらに魅力を高める活動をしていただくことを目的に宇治魅力発信プラットフォーム事業を2015年度から展開しており、本センターは、目標達成に向けてのネットワーク作りや場づくりについて、事業委託を受けています。

今回は、子育て世代の保護者の方を対象とした＜子育て編＞として開催し、11名の方々にご参加いただきました。宇治市に住むきっかけや、子育てについての情報源を参加者同士で共有するとともに、宇治市の子育て支援に関する貴重なご意見やアイデアも沢山頂戴しました。今回をきっかけに、子育て世代への魅力発信をテーマとした新しい企画が動き出すかもしれません。

◉ ぶんきょうサテキャン（宇治橋通り・伏見大手筋）開設10周年

ドリームマップの作成、まちあるきツアーなど、記念事業を随時実施します

ぶんきょうサテキャン（宇治橋通り・伏見大手筋）は、今年で10周年を迎えます。ぶんきょうサテキャン宇治橋通りは、2007年6月10日に開館し、宇治橋通り商店街と連携した 取組も多数開催してきました。学生活動の拠点として、また地域住民の発表の場としても活用しています。ぶんきょうサテキャン伏見大手筋は、2007年10月19日に開館し、2012年より、伏見大手筋商店街「伏見そば処更科」さんの2階に移転しました。子育て世代や親子を対象にしたイベントを中心に展開中です。

サテキャンでは現在10周年を記念し、様々な企画を実施しています。1つ目は「10周年ありがとう！これからの宇治・伏見のドリームマップを描こう」と題し、利用者や来場者に「これからサテキャンでやってみたいこと」「こんな『まち』にしたい！」「宇治、伏見の夢 」などを書いていただき、1枚の大きなドリームマップを作成しています。また、7月から3回シリーズでサテキャンのある宇治と伏見をつなぐ「まちあるきツアー」を実施します。第1弾は、「商店街理事長と行く！地域密着商店街ツアー」。サテキャンのある宇治橋通商店街振興組合、伏見大手筋商店街振興組合の両理事長にお越しいただき、理事長自ら、商店街の自慢や見所、オススメを紹介します。他にも、毎月フィールドリサーチオフィスが発行するサテキャンのイベント情報紙「ぶんきょうサテキャン情報Spiral Up」の紙面に、サテキャンを利用する団体やその取組を紹介する新コーナーを設け、宇治と伏見を交互で取り上げていきます。

お知らせ

全国まちづくりカレッジ（まちカレ）2017 in宇治

- **日時 ： 2017年9月15日（金）13:00～20:00／16日（土）9:00～16:30**
- **会場：京都文教大学／中宇治地域一帯**

まちカレとは、地元商店街や行政などとの協働によるまちづくり活動に携わる学生団体・大学教職員、地域関係者が一同に会し、情報交換や交流、課題の共有を図る“まちづくりに取組む学生たちによる全国大会”です。2002年に始まり、有志で集まった参加校が持ち回りで担当しています。19回目となる今回、京都文教大学が開催校を務める運びとなりました。

【プログラム】

1日目（9月15日）
・参加団体による活動発表
・「まちづくり」に関するワークショップ
・懇親会

2日目（9月16日）
・中宇治地域一帯でのフィールドワーク

【参加予定校】

國學院大學北海道短期大学部／静岡産業大学／東海学園大学／星城大学／名古屋学院大学／岐阜経済大学／皇學館大学／滋賀県立大学／京都府立木津高等学校／京都府立農業大学校／香川大学／西南学院大学／長崎国際大学／鹿児島県立短期大学／京都文教大学　ほか

- **主催：京都文教大学全国まちづくりカレッジ2017in宇治実行委員会／京都文教大学 地域協働研究教育センター**
- **問合せ：京都文教大学フィールドリサーチオフィス**

京都文教大学 地域協働研究教育センター
ニューズレター「ともいき」vol.11（2017年7月発行）

発行：京都文教大学地域協働研究教育センター

【お問合せ】
京都文教大学フィールドリサーチオフィス
〒611-0041　京都府宇治市槇島町千足80　TEL：0774-25-2630　FAX：0774-25-2822
E-mail：fro@po.kbu.ac.jp　京都文教大学／京都文教大学地域協働研究教育センター

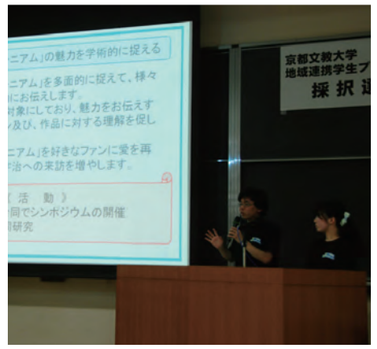
京都文教大学　文部科学省 地(知)の拠点　文部科学省 地(知)の拠点

京都文教大学 地域協働研究教育センター

ニューズレター ともいき TOMOIKI vol.11

2017年7月発行

「京都府南部地域 ともいき（共生）キャンパス」でのさまざまな活動をお伝えします。



平成29年度　地域志向教育研究　ともいき研究助成事業（住民参画型／産官学協働型）
平成29年度　地域志向協働研究　共同研究プロジェクト

地域を志向した研究を推進！
地域とともに研究に取組みます

地域における本学の教育、研究、社会貢献活動を一体化し、その成果を本学の教育活動や地域の発展に還元、寄与することを目的に、平成26年度から始まった「地域志向協働研究」・「地域志向教育研究　ともいき研究助成事業」。（以下、両研究の総称として「ともいき研究」と標記）本学の学問特性を活かし、地域福祉、保育、教育、まちづくり、観光、地域コミュニティ、防災など、様々な分野の研究をこれまで行ってきました。

「ともいき研究」では、本学教員のみならず、地域の方からも研究を募集し、本学教員とのマッチングを行うことで、共同研究を行っています。地域の方々が感じているニーズや課題、大学と協働したいと考えている事項を把握する機会ともなっています。また、各研究テーマに基づいた「ともいき講座」（公開講座）やまちづくりミーティングを開催し、地域課題の共有、研究成果の地域還元にも努めています。

大学の持つ様々なリソースを活かしながら、住民、企業、行政、各種団体等、地域パートナーと協働して、地域の課題に取組んでおり、今年度は、15の共同研究プロジェクトが採択されました。

次ページからは、今年度採択された研究の概要と、共に研究に携わる研究分担者や協力者の地域パートナーの皆さんをご紹介します。

講師を迎えての研究会

地域パートナーと視察調査へ

学生もグループミーティングに参加

「ともいき講座」で広く発信

研究成果報告会

■ともいき研究の流れ

2月～3月
- 研究応募のための事前相談
  - どのようなことを課題に感じているのか、事業として実施するのではなく、研究として組み立てるには・・・など、漠然と感じていることから、具体的なことまで、相談を受け付けます。相談内容を整理した上で、研究として応募されるものもあれば、違う形での連携に発展するケースもあります。
- 研究応募

4月
- 本学教員とのマッチング
- 採択審議
  - 採択後 研究START!

平成26年～平成29年
ともいき研究採択延べ数 **56件**
地域からの研究参加者延べ数 **221人**

5月～3月
- 研究活動・ともいき講座等の実施
  - 研究会や、調査・分析、視察等を通して、地域課題に取組みます。また、研究成果の地域還元として、「ともいき講座」や、研究会主催研修会、まちづくりミーティング等を実施します。
- 報告会の実施
- 報告書の作成
  - 一年の取組のまとめとして、報告会での発表、報告書の作成を行います。

プロジェクト1　ともいき研究・住民参画型

グローバル化時代における地域の国際協力あり方を探る

学内研究員 4名　学外研究員 4名

研究代表者：松田 凡（総合社会学部総合社会学科 教授）

昨年度は、京都府における日本語教室の現状、宇治市における日本語教室の実施状況、災害時における外国人支援、外国籍児童・生徒の生きづらさについて、共有することができました。今年度はさらに、外国人として日本で暮らす当事者の経験やそのサポートをされてきた方々のお話しを伺い、多文化共生の今日的課題と地域に暮らす外国人支援のあり方について調査・研究をすすめます。それと同時に、こうした課題についての、大学としての人材育成のあり方についても、地域の方々のご意見を伺いつつ考えていきたいと思います。

地域パートナー　大久保 雅由さん
（城陽市国際交流協会 事務局長）

人口減少が始まり山城地域でも労働力不足との声を聞くようになりました。外国人労働者による補充は、同時に生活者としての外国人を受け入れることと直結しています。明確な移住政策を持たない日本では、対応が地方に任されていまが、山城地域での本格的な多文化共生施策の実施はごく僅かです。この研究が学生や地域とともに「外国人とのともいき」の実現に寄与し、外国人による地域の活性化に発展していくことを願います。

プロジェクト2　ともいき研究・住民参画型

京都府南部地域における障がい者の就労支援に関わる研究

学内研究員 2名　学外研究員 7名

研究代表者：吉村 夕里（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

雇用分野の差別の禁止と合理的配慮の提供義務を定めた改正障がい者雇用促進法の施行に伴い、障がい者雇用促進の取組が各地で展開されています。本研究では、従来から実施してきた障がい者の就労支援に関わる関係者との研究会や、障がい者の大学教育への参画を図る事業や、福祉施設と協働した学生への朝食サービス事業等の企画実施をとおして、障がい者の社会参加と、学生との交流を図る活動の促進に努めます。また、障がい当事者や関係者の意見聴取に基づき、大学のリソースを活用した「障がい者の働き方」モデルの検討や、「ともいき」キャンパスの実現を阻害している要因や地域課題の分析を行います。

地域パートナー　石崎 蓉子さん
（社会福祉法人 同朋会 どうほうの家 所長）

研究への参加と同時に、どうほうの家も朝食サービス事業をとおして、平成28年から京都文教大学の学生に関わらせていただいています。学生にとっても、障がいを持つ当事者にとっても、事業所にとっても、とても意義のある取組みとなっていると感じています。障がいを持つ方の多様な「はたらく」が実現出来るように、様々なチャレンジの機会が増えていったり、地域で当たり前のように交わる場が増えていったりすれば良いと思っています。

プロジェクト3　ともいき研究・住民参画型

まきしま絆の会、宇治市、京都文教大学が紡ぐ地域連携の創造
ー地域と結びつく親と子の絆づくり、子どもへの学習支援ー

学内研究員 4名　学外研究員 4名

研究代表者：寺田 博幸（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

一般社団法人マキシマネットワーク、NPO法人まきしま絆の会、宇治市と本学が連携し、地域を志向した教育研究を行っています。毎週、会場のコミュニティカフェ「Reos槇島」では、放課後の子どもに安全・安心な居場所を提供し、学生による学習支援と紙芝居、折り紙などで楽しい時間を過ごしています。今、30名を超える子どもたちの元気な声が会場いっぱいに響き渡っています。夏季、冬季の休業では、京都文教大学を会場にして宇治市の子どもと保護者を対象にした「親と子の体験教室」を実施します。本取組を通して、こども教育心理専攻生を中心とした学生スタッフが児童理解について実証的に学びながら、親と子の絆づくりや子ども同士、保護者同士のつながりに貢献することを目指しています。

地域パートナー　櫃田 尚美さん
（Reos槇島）

この研究をきっかけに、地域の居場所づくりをめざし、開設しているコミュニティ・レストラン「Reos槇島」で、放課後の子どもの居場所と食事を提供し大学生が学習をサポートする「つながりひろば」（子ども食堂）を立ち上げ、大勢の子どもたちで賑わっております。私も一緒に楽しみながら、今後もさらに槇島を元気にしていきたいです。

プロジェクト4
ともいき研究・住民参画型

記者体験活動により
地域の子どもたちのシティズンシップを育成する研究

学内研究員 2名
学外研究員 5名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

京都府南部地域は、今後急速な人口変動が予想され高齢化が進み、地域のアイデンティティや地元愛が育たないだけでなく、新しい地域の担い手を育成することが困難となっています。これらの課題を改善するため、本研究では、子ども記者クラブによる記者体験活動を手法として、地域の情報を発掘し、子ども達の目線で発信することで、子ども達自身が自分たちの住む「まち」に対する愛着をもち、地域の一員として地域に貢献しようとするシティズンシップを育成することを目的とします。子ども記者クラブの活動を通して、よりよい市民を育成するための、知識、技能、態度を身に付けられるようにしていきます。

地域パートナー

梅原 幹正さん
（株式会社洛南タイムス社 工場長）

子ども記者クラブは３年目を迎えます。取材当初は緊張している子どもも、地域の方々と話したり写真を撮ったりしているうちに、どんどん積極的になっていきます。そして私たちが当たり前に思っていることでも柔らかな目線で質問し、記事にしていきます。取材に協力してくださる方々や、「見つけた地域の魅力を伝えたい」という子ども達の熱意を裏切らない紙面作りを、今後も続けていきたいと思っています。

プロジェクト5
ともいき研究・産官学協働型

宇治市における「ものがたり観光」の定着と振興

学内研究員 2名
学外研究員 4名

研究代表者：片山 明久（総合社会学部総合社会学科 准教授）

宇治市は源氏物語宇治十帖の舞台であり、その世界観を味わう観光が江戸時代より行われてきました。また近年では、宇治市出身の作家武田綾乃氏による「響け！ユーフォニアム」が発表され、若いファンがその世界観を味わう観光を楽しみつつあります。この研究会の目的は、これらの観光を「ものがたり観光」と名付け、それをさらに振興させる方策を検討し、宇治における「ものがたり観光」の定着を図ることです。そのために、シンポジウムの開催などを通して、両作品の魅力を多様な側面から再評価し、新たな観光の喚起につなげていきたいと考えています。

地域パートナー

多田 重光さん
（公益社団法人 宇治市観光協会 専務理事）

今日宇治には550万を超える観光客が訪れ、海外からの観光客も急増しています。しかしこれらの観光客の方々に、まだまだ本当の宇治の魅力を十分に伝えきれていないのではないかという課題もあります。近年では「響け！ユーフォニアム」ファンの方に数多く宇治を訪れていただいており、宇治の観光の新しい側面に注目していただけるチャンスであると認識しています。この研究会の取組が、宇治の新しい観光の喚起につながることを期待しています。

プロジェクト6
ともいき研究・産官学協働型

宇治・伏見における地域防災に関する連携

学内研究員 6名
学外研究員 6名

研究代表者：澤 達大（総合社会学部総合社会学科 准教授）

防災・減災の備えは日頃から必要という認識は高いものの、行動につながっていないのが現状です。本研究では過去2年間にわたり、高齢者を中心とする災害弱者への対応を中心に考察を進めてきました。その中で、緊急時における公助の限界を認識した上で、地域防災計画や自主防災組織の充実は、自助・共助の観点から非常に重要と考えられます。今年度は、それぞれ個別に実践してきた学内の防災関連のリソースを集結させ、さらに地域防災に取組む組織とのより一層の連携を図り、地域防災のために大学としてできることを考察していきます。

地域パートナー

大原 豪さん
（宇治市市長公室危機管理課）

宇治市危機管理課では、災害に強いまちづくりを目指し、毎年開催される防災訓練の他、地域の自主防災組織の推進、育成をしています。大災害時は、交通や通信手段が混乱し、消火や救助等の活動能力が著しく低下します。地域住民が日頃から防災意識を高めることは非常に重要です。この研究をきっかけに大学が地域防災研究の一拠点となり、地域防災に大学生が積極的に関与することを期待しています。

プロジェクト7
ともいき研究・産官学協働型

地域コミュニティ活性化推進のための
改革施策実施にむけた検討研究

学内研究員 1名
学外研究員 8名

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

宇治市においては、近年、町内会・自治会の加入率の低下、役員層の負担の増大や少子高齢化による担い手不足など、コミュニティ活動上の様々な課題が存在し、複雑化しています。本年度は、過去3年間の共同研究の成果を踏まえ、①市民活動の空間・拠点の確保についての検討、②研修・講演会の開催を通じた地域コミュニティ活動に資する人材の育成・意識啓発について、宇治市の現状の更なる分析や先進事例の分析を踏まえ、公共施設管理計画との整合性も視野にいれながら研究を行います。

地域パートナー

大西 太基さん
（宇治市市民環境部文化自治振興課自治振興係 主任）

これまでの研究成果に基づき提示した実施施策案から、市民活動の拠点や、コミュニティ活動の情報収集・発信、研修・講習会の開催を通じた人材育成・意識啓発等について、さらに検討・具体化を進めていきたいと思います。この研究を通じて、これまで地域コミュニティへ参加していなかった層も含めた主体的な地域活動への参画を促し、地域人材の育成や、地域コミュニティの活性化に繋がることを期待しています。

プロジェクト8
ともいき研究・産官学協働型

宇治市認知症アクションアライアンスに関する当事者研究
－「認知症の人にやさしいまち・うじ」の実現に向けて－

学内研究員 1名
学外研究員 2名

研究代表者：平尾 和之（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

高齢者の5人に1人が認知症を患う時代を迎えるにあたって、認知症と共に生きていく社会の実現が課題となっています。宇治市は全国に先駆けてこの地域課題に取組み、平成27年に「認知症の人にやさしいまち・うじ」を実現することを宣言しました。平成28年より始動した宇治市認知症アクションアライアンスでは、認知症のご本人やご家族の体験にもとづいたニーズや評価をいかに施策に反映していくかがテーマになっています。本研究では、宇治市および洛南病院と協働し、認知症当事者の声を聴き取る方法論の確立を目指します。2年目の本年度は、研究成果を踏まえ、さらに改善・進展させていきます。

地域パートナー

森 俊夫さん
（京都府立洛南病院 副院長）

今年度しかできないテーマがあります。それは2年目を迎えた宇治市認知症アクションアライアンスと最終年度を迎えた京都認知症総合対策推進計画の本人評価（当事者評価）との協働でしょうか。どちらも当事者研究が基盤を形成しますから、大学が宇治市と京都府をつなぐ核を形成します。昨年度の蓄積が宇治を越える普遍性を獲得することで、認知症当事者による「本人評価の手法と文化」の確立に貢献できることを期待します。

プロジェクト9
ともいき研究・産官学協働型

精神に「障がい」のある本人とその家族（ケアラー）への
情報提供と支援に関する実践的研究

学内研究員 1名
学外研究員 2名

研究代表者：松田 美枝（臨床心理学部臨床心理学科 講師）

精神障がいを持つ本人の家族（ケアラー）は十分な支援を得られない状態で、心身の調子を崩しながらケアに当たっていることが多々あります。本研究では、これまで地域パートナーと連携し、家族支援パンフレットを作成、精神科医療機関や保健福祉機関に配布してきました。当パンフレットは現場の専門職より好評を得、活用が進んでいます。また、家族からの相談や当事者グループの実践を通して、本人および家族が置かれている困難状況やそこへの効果的な介入方法について、示唆を得ることができました。３年目となる本年は、得られた知見をまとめ、今後の家族支援に役立つように公表していきます。

地域パートナー

野地 芳雄さん
（公益社団法人京都精神保健福祉推進家族会連合会 会長）

精神に障がいをもつ子ども、配偶者、親を抱えて過酷な困難に悩む家族は多く、深刻な相談が絶えません。初期の変調時に、なぜ治療に結びつかないのか？危機的状態に置かれている家族が助けを求めても、有効な支援が届かないのはなぜか？これらを家族だけの問題にするのではなく、国、自治体、社会の問題として真摯に向き合う必要があります。不条理な中でも希望をもって生きられる社会となるように、この研究から賛同者の輪が広がることを心から期待します。

プロジェクト10
ともいき研究・産官学協働型

持続可能な地域社会の形成における市民主体型協働組織の環境まちづくり活動による効果　～ecoット宇治の活動を例に～

学内研究員 1名
学外研究員 7名

研究代表者：石田 浩基（地域協働研究教育センター 専任研究員）

本研究では、環境教育や環境啓発活動に取組んでいる、宇治市地球温暖化推進パートナーシップ会議（通称：ecoット宇治）の活動から、市民が主体となる協働型組織が地域社会やまちづくりに与える効果を検証します。ecoット宇治が取組むプロジェクトは、環境教育を切り口に多岐に渡りますが、それらは単なる環境問題への意識啓発を促すものだけではなく、地域コミュニティの醸成を促す等、持続可能な地域社会の形成に寄与するものだと考えられます。本研究では、市民が主体となる協働型組織や活動を再評価することで、社会的意義を見出し、まちづくり活動に役立てていくことを目的としています。

地域パートナー　居原田 晃司さん
（宇治市地球温暖化対策推進パートナーシップ会議 会長）

市民、事業所、行政である宇治市が互いに協働し、宇治市の地球温暖化防止に向けた具体的取組を推進することを目的として2009年に設立された任意団体『宇治市地球温暖化対策推進パートナーシップ会議』は、温暖化防止を啓発し、身近にできる取組を紹介しています。このプロジェクトに参加することで、それぞれの活動がさらなる発展に繋がり、よりよい活動になることに期待します。

プロジェクト11
地域志向協働研究

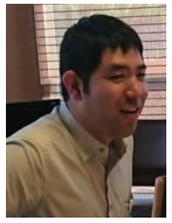
多文化多世代共生の地域コミュニティを考える ー大学・事業者・住民連携による ニュータウンまちづくり推進事業を中心とした実践的研究

学内研究員 7名
学外研究員 4名

研究代表者：杉本 星子（総合社会学部総合社会学科 教授）

向島ニュータウンは京都市の平均より少子高齢化が進み、自治会の崩壊と空き家の増加が進んでいます。また、市営住宅が6割を占めることもあり、子どもの貧困問題、障がい者住宅住民の災害時の救援、中国帰国者や外国籍住民の増加と非日本語母語者の高齢化問題等の課題もあります。こうした諸課題の解決に向けたまちづくりの基盤として多文化多世代が共生し協働できる地域コミュニティが必要です。大学と住民が協働し具体的な課題への取組を進めながら、コミュニティづくりの実践的研究を深めていくとともに、その成果を現代日本社会の地域研究につなげていく理論的な研究の深化を目指します。

地域パートナー　桐澤 夏樹さん
（社会福祉法人京都市伏見区社会福祉協議会）



伏見区社会福祉協議会は向島ニュータウンの二ノ丸学区社会福祉協議会と連携し、中学生の学習会を中心とした子ども・若者の居場所づくりに取組んでいます。高齢化や少子化により、地域活動の担い手が不足していることに加えて、生活に余裕がない世帯や困窮している世帯が集まるという構造的な課題があるなかで、住民だけでなく、学生、市民活動、事業者など多様な主体と一緒になって課題解決に取組むモデルとして実施していきます。

プロジェクト12
地域志向協働研究

宇治市における観光の質の向上方策検討研究 ーインバウンド対応の質的向上を中心に

学内研究員 3名
学外研究員 4名

研究代表者：森 正美（総合社会学部総合社会学科 教授）

宇治市においては、平成25年に「宇治市観光振興計画」を策定し観光まちづくりに取組んでいます。観光交通対策, サイン計画など個別課題についても効果的な対応にむけて努力してきました。しかし計画のなかで謳われている「観光の量から質への転換」が十分に実現できているとはいえず、とくにインバウンド対策についてはかなり遅れています。日本では平成25年以来インバウンドが急増し、その傾向は今日まで継続しています。しかしそれに伴う問題や変化が早くも現れています。今年度は他地域のインバウンド対策などを中心に学び、宇治市における対策の課題と方向性を整理します。

地域パートナー　柯 慈樹さん
（宇治市市民環境部商工観光課 課長）

宇治市には、お茶や世界遺産も含めた社寺など魅力的な観光コンテンツがあります。しかしながら、少子高齢化や若者の旅行離れなどにより国内旅行客については減少が予想されることから、海外からの旅行客の方々に、宇治市に観光に訪れていただき、満足して帰っていただくかが今後の観光施策の大きな課題の一つとなっています。今回の研究により宇治市のインバウンド対策が強化され、海外からの評価が高い観光都市になれるよう協働したいと考えます。

プロジェクト13
地域志向協働研究

高齢者ケアに焦点をあてた 多職種相互乗入型の研修プログラムの開発に関わる研究

学内研究員 3名
学外研究員 4名

研究代表者：吉村 夕里（臨床心理学部臨床心理学科 教授）

近年、認知症高齢者と高齢障がい者の問題に対応するために、介護保険サービスと障がい福祉サービスの一体的提供を目指した地域包括ケアの試みが各地で始められています。本研究では高齢者ケアの問題に焦点をあてて、従来から行ってきた関係者との事例検討会を継続して実施すると共に、認知症高齢者や高齢障がい者やケアラー、その関係者や学生と協働したアクティビティの実施をとおして、当事者の方の能動性を保障することを目的とした環境のアセスメントを実施します。また、援助専門職、住民や学生を対象とした公開事例検討会や研修会を実施して、多職種相互乗入型の高齢者ケアの在り方を検討します。

地域パートナー　徳永 一樹さん（NPO法人ワンハート 施設長）写真上
円山 千穂さん（NPO法人ワンハート 副施設長）写真下

福祉全体の問題として「認知症ケア及び障がい者の高齢化」があげられます。以上は当事業所も直面している問題であり、認知症や高齢障がい者の当事者の方が自分らしく幸せに暮らしていくために、どのようなケアや支援が必要なのかについて事例検討会を通じて学んでいます。今後は、支援者の育成にも取組むと共に、当事者の方に寄り添った支援や地域社会との連携強化に繋がるように、現場での実践に生かしていきたいと思っています。

プロジェクト14
地域志向協働研究

「遊び」を介して行う、子育て・子育ちのフィールドワーク研究

学内研究員 5名

研究代表者：柴田 長生（臨床心理学部教育福祉心理学科 教授）

「遊び」は、保育士がいちばん得意とする分野です。また「遊び」は、子どもそのものです。保育士をめざす学生と教職員が共同で活動している「遊びの実践研究会」を活動母体として、地域内にある子どものために様々な場所へ「遊びの出前」を行うことにより、そこでの子どもたちや子育て支援関係者と交流し、「子育て・子育ちのためのフィールドワーク」を継続実践していきたいと考えています。総合的な子育て・子育ち支援を、主に「遊びの提供」を媒介にして追求していきます。そしてそのために有効な、「遊び」の開発・研究・蓄積を研究していく所存です。地域のニーズも発掘していきます。

地域パートナー　林 友樹さん
（子ども食堂「つなぐ」代表）

活動を始め10ヶ月。地域の方々の協力により、継続して活動することが出来ました。しかし、まだまだ私の考える「こども食堂」の在り方に至っていません。現在の社会では、子どもと大人との関わりが希薄です。そのため、継続して子どもと大人が関われる場所で基本的信頼関係を築き、対話を通して困りごとや気持ちを発信し、経験値を高める機会を提供し、肯定的な評価を得られる場所になるように「遊びの出前」も活用し、「こども食堂」を行っていきます。

プロジェクト15
地域志向協働研究

「宇治学」副読本作成による地域協働型教材開発と 評価・改善に関する実証的研究

学内研究員 5名
学外研究員 6名

研究代表者：橋本 祥夫（臨床心理学部教育福祉心理学科 准教授）

本研究は、平成26年度から、「官学連携による宇治学副読本作成と現場での活用に関する研究」として宇治市教育委員会と共同研究を行ってきました。共同研究では、宇治市内の全ての小中学校で使用する「宇治学」副読本を作成するとともに、指導計画、教師用指導の手引き、ワークシートを作成し、その活用方法を検討してきました。今年度から新たにスタートする本研究では、「宇治学」副読本の作成を継続して行うとともに、これまでの共同研究を基盤に、「宇治学」副読本を活用した授業実践と学習効果の実証的検証、及び評価・改善をし、主体的、協働的、実践的態度を養うことが可能な地域協働型教材開発を行います。

地域パートナー　渡邉 和孝さん
（宇治市教育委員会一貫教育課 総括指導主事兼教育振興係長）

「探究的な見方・考え方を働かせ、地域社会の一員としての自覚を持って、ふるさと宇治をよく知り、諸課題に目を向け、主体的、創造的、協働的に取り組むことで、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目指す。」が、本市における「『宇治学』の目標」です。宇治学副読本の作成、そして、これを活用した学習の展開が、上記目標達成の一助となることを大いに期待します。